

弟子たちは目が見えないことの原因をイエスに聞きましたが、イエスは「神の業がこの人に現れるため」という目的を語ります。イエスは、唾で土をこねてその人の目に塗って、「シロアムの池に行って洗いなさい」と言いました。言われた通りにすると、彼は目が見えるようになりました。当時、唾には癒しの力があると信じられていました。神の業が現れるとは、目が見えない人の目が開かれることでした。この福音書ではイエスによる奇跡を「しるし」と記しています。私たちと同じ人間の姿の中に隠されているイエスの本質、イエスは神さまから世に遣わされた神の独り子、神さまと等しい者である、を現す出来事が「しるし」なのです。彼の周囲の人々は、彼の目がイエスによって開かれたことを知ると、「イエスはどこにいるのか」と問いました。この福音書では「イエスはだれであるか」という問いが、「どこにいるのか」という空間的な問いになっています。彼は「知りません」と答えます。人々は彼を当時の宗教的指導者であるファリサイ派の人たちのところへ連れて行き、どうして見えるようになったのかと尋ねました。彼はイエスを否定しようとしながら尋問してくる人々の応答の中で、次第に明確に答えて行くようになります。彼は、「あの方は預言者です」(17節)と答え、25節では自分が見えるようにされた事実を語り、遂にイエスを神のもとから来た方と言うのです(33節)。ファリサイ派の人たちは、神さま、聖書について知っているという意識により、その判断基準に当てはまらないイエスを「知らない」ことになってしまいます。逆に、「自分は知らない」ということから出発する彼は、かえって自由にイエスの本質を知ることができたのです。39節の言葉は、その事実を示しています。彼が会堂から追い出されたことを聞いたイエスは再び彼に会い、彼はひざまずいて、告白します。このようなイエスとの出会いが与えられることが著者が記す「目が開かれる」ことなのです。私たちも、信仰生活の中で、自ら見える者となってしまうことがあるのではないかと顧みなくてはならないのです。信仰は神さまの招きに対する応答です。しかし、与えられた招きを人間が受け止めて理解し把握することの中で、それが人間の業となり、「見える」と主張することにつながるということが起こるので、そのような人たちに向かって、イエスが語られるのです。「今、「見える」とあなたたちは言っている。だからあなたたちの罪は残る」。私たちは開かれた目でイエス・キリストを見つめつつ、共に歩む者でありたいと思うのです。